



TITLE:

火星を観る人々に

AUTHOR(S):

ピケリング, W. H.

---

CITATION:

ピケリング, W. H.. 火星を観る人々に. 天界 1922, 2(17): 87-92

ISSUE DATE:

1922-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159681>

RIGHT:

要するに現在の所、どちらも推測に過ぎない。

此の號の世に出る四月初旬ともなれば我が親愛なる火星は益々地球に接近し、三千四百萬里となり、等級は正に零等を越えて、蛇遣座の南方にアンタレスと其の赤

色を競ひつゝ、著しく

人目を曳く

事であらう

ひら／＼と

花間を彷徨

ふ蝶の様な

輕快な心持

ちになり、

花に浮かれ

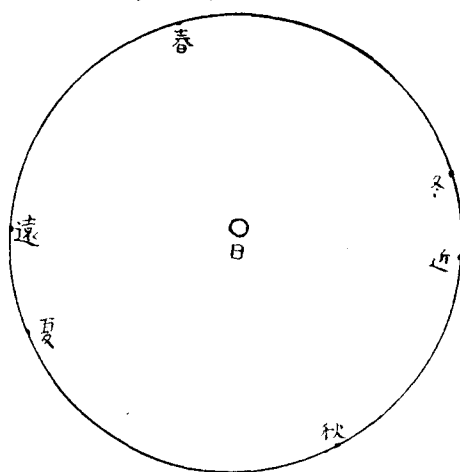
人に戯れる

もよいが、夕陽西山に没し、宵闇があたりに充ちる

頃、三日月(四月一日の夜とする)が夢の如く淡く、

低い西空に懸り、火星界にはないが、地上にはある

薄絹の霞のヴェールが上空一面を鎮した、其のヴェ



第四圖

ールを通して、東南の低い空にアンタレスと我が火星とが徐々に昇つて出る。其の有様を凝<sup>ち</sup>と心を澄まして眺め、且つ思念するのも亦趣味ある事である。何でも遠い所からの訪れ人は誰でも歡び迎へるであらう。外國から元帥とか皇太子とかの來朝があれば皆人々は業務を放擲して走せ迎へるではないか。今や火星人は火星と云ふ大きい船に乗り、空間と云ふ大洋の波否エーテルを押し別け、同僚の地球人に面會に來たらうとして居るのである。恥を知り、名を惜しむ地上の文明人たる者此の期に臨み唯惘然と手を拱いて、嗜眠状態を貪つて居て其れで善からうか乞ふ。根限り、機械の能力の限りを盡くして其の齎らす消息を洩らさず諒解せよ。

## 火星を觀る人々に

ジャマイカ島

W・H・ビケリク

此の度の衝に、火星は一九〇九年以來の最も近い距離まで、吾々に近づいて來る。此の好都合の代りに、星は其の軌道に沿ふて、南へ行けるだけ行つて

了うことになり、黄道から二度半ばかりも南へ外れるから、北半球の觀測者達、殊に歐羅巴の人々には位置が低くて、すいぶん御氣の毒にちがひない。だから吾々は濠州やニュージールランドや南アフリカに居る素人天文家達が協同觀測の報告書へ、觀測スケッチをよこして下さるばかりでなく、南方の天文臺に居る専門家達も此際、若干の時間を割いて、此の種の觀測に献げられんことを望むものである、蓋し、こんな場合にこそ彼等の援助が眞に必要なのであるから。六枚のスケッチを一時間に一枚づ、畫くとして、六時間あれば充分なのである。誰でも一寸畫のける人ならば、何も初めから準備や練習をして置く必要はない。(中略)總ての見取圖はジャマイカのマンデグイルへ送つて貰ひたい。

衝は六月十日に起るのであるから、見取圖は一般に五月十日頃から七月二十日頃の間にして貰ひたい。しかし此れより早い時のも遅い時のも喜んで受ける。是非六枚づ、揃つたのを送つて頂きたいとは言はないが、天氣さへ許せば勿論揃つてゐるに越したことはない。出來れば後に纏めて、表にしたりしたいと思ふから、成るべく精しく一枚々々に説明をして置いて貰ひたい。火星の赤緯は、五月十日に南緯二十四度半、六月十日に同二十六度丁度、また六月二十日には同二十六度一となる。直徑はそれ／＼一六・二秒、二〇・三秒・一七・九秒であるし、太陽の黄經は一五四・五度、一七一・三度、一九四・二度である。——これは丁度火星の世界の八月四十六日、九月二十一日、十月三日に當る。又、星形の中心の

## 神戸行き

山 本 生

新着望遠鏡の税關手續き、スコフィールド氏の八時半拜見、神戸女學院の約束、それに今一つ尼ヶ崎教育會の招待、この四つの用事をかたて、私は二月二十三日朝八時發の汽車に乗つた、車中ではうつ／＼。十時に三宮着直ちに海岸通りの開通社運送店に行き、案内して貰つて、税關に出頭した。しかるに幸ひにも會員分部誠一氏が税關の掛り員として種々親切に御世話下さつたので萬事頗る好都合に運んだ。此の日、入關手續を了した望遠鏡は大きなもの小さなもの總計五個。

税關を出で、少し時間があつたので、江戸町の國際書房を訪れた。獨逸から天文の古本がぞつさり着いてゐると言ふので、堪らず見たくなり、無理を願つてうす暗い倉庫中に連れて行つて貰ひ、大急ぎに眼をよぼし、涎を垂らしながらページ／＼をめくる。けれど、今眼の前の數百冊、とても殘りの十五分時間に見盡せない。最早其の内にケチデイ氏と約束の十二時が來さうなので、惜しいと思ひながら、「それでは宜しく」と頼んで置いて

緯度はそれ／＼北一・二度、北五・五度、北九・七度である。だから吾々は星の南半球の方が比較的都合好く見える筈ではあるが、しかし北半球だつて大同抵じ程度には行ける。星は六月十八日の日、我々に最も近くて、視直徑は二十秒半に達する。運河は夏至の直ぐ後に最も數多く又明瞭なのであるが、これは既に一九二一年十二月二十六日に起つたのであるから、今度の場合には餘り澤山は見えないだらうとは思ふが特に大きな運河の形狀には注意を拂ふべきであらう。C地方、即ち緯度一二〇度あたりは、細かいことが殆んど見えなないかも知れないけれど、觀測者は別に失望しなくても好い、何故といへば其邊は大南海の北に當るところで、今までも大したものは見えなかつたのだから。一九二二年四月二十二日以後は、火星は、一年中の季節から言へば、長い前から幾度も起つた中で、(他のことは同様としても)吾々に最も近く見るやうな、軌道上のそうした位置に來るのである。その日は火星の八月二十九日に當る又、火星の秋分即ち太陽の黃經百八十度の日は其の世界の九月三十七日で、地球の六月二十六日に起る筈である。

無理にも、兎に角六種の見取圖を畫かうと特に熱心するつもりは觀測者達には、次の御注意を二三申上げたい。丁度火星が吾々に最も近い頃全體を通じて、南海の北の境界で、經度一八〇度乃至二二〇度のところは太陽に連れて、だん／＼北の方へ移動中の筈である。此の移動は北端からでも南端からでも測微器で測ることも出来るし、見取圖からでも知

其の家を辭した。

次は約束の十五ベルディング。漸く定刻にたどり着いて入口に入らうとするが、そこに前の大阪の會で見覚えのあるケチデイ氏が人待ち顔に立つてゐられる。いふまでもなく、待たれる人は私に定まつてゐる。直ぐさま、*"How do you do? Mr. Kennedy?"* 呼びかけるが「おい、山本さん、よく入らつしやい」といふ御挨拶。早速、連れられて地下室の食堂に入るが、そこへ一人の西洋人が見えた。ケチデイさんは「ミスタ・スコフィールドを紹介します」と言はれる。Oh Mr. Schofield! *I am very glad to meet you.* フレシンの愛讀者、八時半の所有者として、名前だけは前から知つてゐたスコフィールドさんと、手を握り合ひ、打ち喜ぶうち、又々やつて來たのは一人の西洋人、これもケチデイさんの紹介をわづらはす。名は初めて承はる Mr. Duggan、やはり星好きだ。聞けば、もはや他人ではないやうな氣がする。さて四人が卓につき、パンをかぢり、フオクを運はせながら聲は大きい、例によつて、あたりかまはず天文談。ケチデイさんの南十字架座を見た話や、ドイツのトレプトウ天文臺を訪うた話、

れる。前者の方法がどちらかと言へば、比較的因はれざる結果を得ると思ふが、後者の方法は却つて正確な値を得るだろう、何故といへば測微器といふものは本統の値よりか、よほど大きな、わけのわからない誤りを伴ひ易いから。

一九二〇年度の出現の時は、大シルチス附近に大變著しい雲の形を多くの観測者が認めた。ジャマイカでは曇天のために之れがたゞボンヤリとばかりで好く見えなかつたけれど、ロウエル天文臺で取つた二枚の立派な見取圖がポピュラア・アストロノミ誌第二十九卷に出てゐる。其の時、太陽の経度は一一九度で、丁度火星世界の七月三十三日に當つてゐた、今年も二月の末か三月の始めに、同じやうなものが見えるのかも知れない。又、其の頃、缺<sup>かき</sup>際<sup>さい</sup>から外へ飛び出たやうな雲が見えることもあるだろう、と言つて必ずしも別に前と同じ地方に出ることも言はれないが若しそんなことでもあれば、それが見える間毎夜續けて、注意深く観測して貰ひたい。此うした観測の目的は火星の風の方向と速さを知るためである。しかし此れも單に其の徴候を知るのみに止まるだろうと思はれるのが、残念のやうな氣もするが何分、雲は一方には絶えず濕氣の凝集があり、又他方には蒸發と消失とが行はれるのに観測が妨げられるだろうから。兎に角、こんな観測は雲の高さを測ることにものなるので充分注意してやつて見る價值はある。殊に一九二〇年以前には長い間、一度も記録されなかつたこともあるのだから。

スコフィールドさんの太陽觀測苦心談、ドレッツサーさんはオリオンの好い形に感心せられる私は先日ケ子デイスさんから頂いたハレイ彗星記念メダルを虫眼鏡で検査した話——やはり話は盡きそうにない。しかし、それ／＼午後時間の豫定もあるからと言つて、一時頃、一旦席を立ち、ドレッツサーさんは「さよなら」、あさの三人は電車で中山手のスコフィールドさんの家に行つた。「御入り、御上がり」と案内せられるがまゝに、階段を上に登りつめて見れば、屋根裏は二間四方が立派な觀測室になつてゐて、屋根は圓錐形の廻轉屋根になつてゐる。中央に据えてゐるのは、所謂最近輸入のカルヴァ鏡八吋半、長さがすいぶん長いので、室の中は大へんに窮屈である。尤も聞いて見れば此の室は先月まで六時鏡が据えられてゐたとのこと、なるほど六時の室、其のまゝ八時半の室に用ふるのは、ちと無理には違ひない、器械のあちこちを見せて貰つたり、屋根を開けて貰つたり、一通りの事情はわかつた。すると、スコフィールドさんは傍の机の中から汚れた帳面を出して、中々見せて下さる。見ると、中には金星や、木星や、火星の、生きてゐるやうな美しいスケッチが

も一つ面白いことはトツとネプテスが消失して、其の代りにアメンテスが現はれるだろうといふ豫想である。これ等の運河は皆、今までも、すいぶん明瞭に見えたので、多分、空氣の好くも無い夜にしかも小さな望遠鏡でも見ゆるにちがひない。今日までの観測によると、此の消失は突然と起るものではなくて、これ等の運河が、交はるゝ數ヶ月間見えるかも知れない、時々トツとアメンテスが二つ并んで一所に見えたこともあるんだから。一九二〇年に丁度このことがあつたが、今年ならば六月二十日に當るのである。しかしフイリップ氏はアメンテスを一九二〇年の時は、もつと、よほど早い時に發見したさうである。

さて、私は、火星に於てあの頗る明瞭な、そして興味多い雪嵐の現はれることを述べよう。これは最初、火星の八月十九日の日に北半球に現はれるのであるが、之れは一九二二年四月十二日に相當する。そして地球の殆んど二ヶ月ほども續く。その次ぎには廣い面積にわたつて薄い霜が現はれ、後になると之れはずつと北方の一部にのみ限られることになる、今まで四ケ年度、吾々は此の北方の雪冠をたよりとして、見取圖の位置をきめることが出来たが今年度は、既に消失した後になるから、之れは駄目である、今後、正確に位置をきめやうと思へば吾々は曆をたよりとして、望遠鏡に附いた位置環によつて十字糸を置くより外には仕方がない。

前に述べた通り、一九二二年六月二十六日の火星の秋分の時までには、

書いて、鉛筆で精しく説明が加へてある。よく細かいところに氣を付けて、全く専門家に劣らない腕前である。私は此の時まで、スコフィールド氏を只の星好きさのみ思つてゐた。しかるに此のスケッチを見て、俄かに特別な尊敬が拂ひたくなつた。「だから天界を讀まない前から、アレテンを讀まれるのだ」私がかう頷いた。聞くところによると、このスコフィールド氏は Phrase Code の考案業で、晝の間に非常な多忙の人であるといふ。しかるに、夜になると、人の休む暇に、ひっそり屋根裏に上つて、樂しみの星視き。それも、この神戸の塵に汚れた空、地平線は全く駄目さへふところ、普通の素人としての星視きに満足せず、午前二時や三時の夜更けに、木星や火星の表面に現はれた形を寫される有様など——私は同氏の話をきくながら、此の多趣味眞摯な生活を想像して、頗る望遠鏡さを見比べつゝ、たゞ感じ入つた。

私がスコフィールド氏の家にゐたのは僅か三十分であつたが、此の三十分間は私に取つていろんな意味に、深い印象を受けた。「今年の火星の観測期には、しつかり御やいなさい」かう言つて、私は一時四十分に、此の家を辭

火星の南極附近は黄白色の雲で覆はれるだろうと思ふ。しかし此日頃になつて、雲は破れ始め、其下層の輝かしい青色の極雪を現はすだろう。此等の極雪は極から數度離れた點を中心として、經度は三十度ぐらゐであるが、多分、面積が廣くて、こうした事實は、始め、よくわからないかもしれない。雪が始めて見を出す日附は注意を願ひたい。

今年は、南海の綠色が著しい筈である。其の前に灰色であつたのが綠に變るところを注意して見ねばならぬ。しかし、眞に價値のある觀測はかなり大口徑の望遠鏡などが必要である。砂漠地方の色が、黄から橙色に變る變化は、多分、色尺度カラースケールが色楔を使へば觀測が出来るかもしれない。二三、はつきりとした斑點の緯度や經度を觀測することは、いかなる場合にも必要である。何となれば、火星の表面上を、季節によつて移動することが少ないから。特に此の種の觀測に適當な斑點の目錄を、前に或る所で發表したこともあつて、其の節、いろ／＼と次の出現期に見えそうなものの主な事柄を述べたのであるが、とにかく、注意深く、繼續的の觀測をすれば、すいぶん、新しい事や、全然豫期しなかつた事などを發見するもので、非常な興味を喚起するものである。(K Y 譯)

**來朝** 相對原理の大立者であるAアインシュタイン氏は來る九月南印度洋上の日食觀測に出張せらるゝ序でを以つて、十月頃我が國に來朝、九州、京都、東京の各大學で講演をせられる筈。

又、天體力學の大家であるスウェーデンのシャリエー氏は今年九月頃、右のAアインシュタイン氏に先んじて、來朝せられるといふ。東京京都兩天文臺では今其の歡迎方法を計畫してゐる。

世界的天文家二氏の來訪は我が學界の新記録といはねばならぬ。

した。

二時、女學院で院長ミスデフガレストや横川、三浦兩教授に迎えられた。學院は諏訪山の麓を占めた土地を構内さして、美しい庭には早い梅の花と香がたゞよつてゐた。日和は好し、校舎の赤煉瓦と木々の綠とは心地よい感じを與へてゐた。私は下町の雜沓から、今こゝに逃れて來て、まことに清々しい心になりながら、暫くの間、二階の應接室の窓から飽かず庭の景色を眺めてゐた。

講堂は二時半に開かれ、多數の女學生達は階上階下の席についた。私は導かれて、壇に上り、院長の紹介ののちに、前に進み出て口を開いた。講演の題は「星々の世界」といふ題であつたが、今こゝに内容は略す。要するに人と天との交渉から、星そのものの研究、それから木星金星など、我々の經驗以外のよその世界の話にも及んだ。講演は四時に終つた。夕空は殊の外美しかった。それで、ふと思ひ付きで御隣りのマヤス博士の邸をたづね、幸ひに博士が在宅せられたので、今夜の觀望のため三時半望遠鏡の拜借を願つたところ、直ちに承諾して下さつたのは嬉しかった。それから、元の學院へ歸り、院長の宅で諸教授